

## X 訪問対面調査(概要)

### 1. 高齢者への対面調査

#### (1) 圏域別の実施状況

アンケート調査の補足調査として、グループインタビュー調査を中心としたヒアリング調査を実施しました。

若年

		奈良	西和	東和	中和	南和	合計
グループ数		3	3	3	4	3	16
参加者数	グループインタビュー	15	16	14	9	7	61
	自宅訪問	1	0	0	2	0	3
参加者合計		16	16	14	11	7	64

一般高齢者

		奈良	西和	東和	中和	南和	合計
グループ数		4	2	2	5	3	16
参加者数	グループインタビュー	20	10	12	18	14	74
	自宅訪問	18	13	2	4	6	43
合計		38	23	14	22	20	117

#### (2) インタビューで出された主なご意見

##### ① 日常生活について

<p>日常の楽しみや健康づくりについて</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>健康管理については、程度や方法は様々であるが、若年、一般高齢者ともに大半の人は気を使っている。気を使っていることについては、食事、定期的な運動、規則正しい生活習慣などが多い。</li> <li>食事については、栄養のバランスや野菜を多くとるといったことを心がけている人が多い。</li> <li>運動については、日頃から定期的に運動など体を動かしている人と、ほとんど行っていない人に分かれる。特に若年では、仕事をしている人が多いこともあり、定期的な運動を行っている人が少ない。</li> <li>日常的に体を動かしている人は、個々の嗜好に合わせて活動している。多くあげられたものとしては、若年では、ウォーキング、フィットネスクラブでのトレーニング、体操などがある。また、一般高齢者では、ウォーキング、スイミング、ヨガ、体操、ゴルフなど、若年者に比べて様々な種類の活動を実践している。</li> <li>若年、一般高齢者ともに、おおむねどの人も日常の楽しみや生きがいをもって生活をしている。若いころから続けている趣味もあれば、高齢期に始めた趣味などもある。趣味の活動の場も様々で、自分の好みにあったところをうまく見つけて活動している人が多い。</li> </ul>
-------------------------	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な趣味として多くあげられたものは、若年者では地域でのボランティア、旅行、友人・仲間とのつきあい、園芸、囲碁・将棋、読書などがある。また、一般高齢者では、老人会への参加、山登り・ハイキング、地域でのボランティア、旅行、友人・仲間とのつきあい、園芸・ガーデニング、カラオケ、写真、パソコンなど多様な趣味があげられ、特に一般高齢者はたくさんの趣味や楽しみを持っている人が多い。</li> <li>比較的若い高齢者は、老人会への参加に抵抗を感じている人もみられた。多くの人の意識として、老人会は70歳くらいを過ぎてから入るといったことや、名前に抵抗を持っている人も多い。また、参加者の固定化や老人会の加入者の高齢化が顕著となっているところも出てきている。</li> <li>趣味などを通じて交友関係を密にしている人も多く、趣味だけでなく、日常生活の情報交換や相談などを行っている人も多くみられた。</li> </ul>
地域とのかかわり	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域とのかかわりについては、地域行事への参加や、地域の自治会の役員などを経験している人は多い。しかし、高齢（おおむね80歳以上）になるにつれ、地域とのかかわりが少なくなる傾向にある。</li> <li>地域の老人会活動が活発なところは、老人会を通して、さまざまな地域活動を行っており、地域とのかかわりも比較的密となっている。</li> <li>一方で、地域の高齢者の見守りや通院介助などを積極的に行っている人もいる。活動例としては、一人暮らしの高齢者の声かけや会食会、通院介助、施設でのボランティア、子どもの登下校の見守り、防犯活動、子育て支援のボランティアなどがあげられていた。</li> </ul>
日常生活で不便なこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>実際に不便を感じているといった声はあまり聞かれなかったが、最も多く聞かれたのは公共交通の不便さである。公共交通機関がほとんどなく、自家用車での生活が主となっている地域では、コミュニティバスなどの充実を望む声が多く聞かれた。</li> <li>将来的な不便などについては、車の運転ができる人が多いこともあり具体的なイメージがあまりないため、不便を感じる人が少ないものの、中山間部では、日常の買い物などへの不安を持っている人もいた。</li> </ul>
不安なこと	<ul style="list-style-type: none"> <li>災害時に対する備えについては、若年、一般高齢者ともに意識している人がほとんどおらず、具体的な対応について検討している人は少ない。</li> <li>また、日常の声かけや見守り体制を整えているところも一部の地域のみみられた。</li> <li>子どもと同居している人や近居にいる人は、いざという時に頼りになるのは子どもと考えている人が多い。</li> <li>近所づきあいが親密な地域においては、近所の人を頼りにしている人も多い。</li> </ul>

## ②相談や介護について

相談窓口の認知度や相談者の有無	<p>【相談窓口の認知度】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域包括支援センターの認知度はかなり低い。</li> <li>・ 他の相談窓口についても具体的にイメージできる人が少ない。</li> </ul> <p>【相談者の有無】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 相談者は配偶者や子どもと考えている人が多い。</li> <li>・ 市町村役場などに相談に行ったことがある人は少ないものの、何かあったときにはとりあえず市町村役場に相談に行くことを考えている人が多い。</li> </ul> <p>【情報の伝達について】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市町村の広報誌は読んでいる人が多い。しかし、関心がないと目にとまらず読み飛ばしてしまうことが多いため、相談窓口や民生委員などの連絡先などは冊子などで保存しておけるような形態で配布してほしいといった声が聞かれた。</li> <li>・ また、介護や認知症などについては、必要に応じて定期的に広報誌で特集などの形で情報提供されると、一番伝わりやすいという意見が多く聞かれた。</li> <li>・ その他、介護関連の情報入手は主にはテレビや新聞などのマスメディアが多いが、あまり関心がない人は、マスメディアで取り上げられていても、関心が高まるということはない人が多い。体験者の話などを交えながら具体的に話を聞くことで、考えるきっかけになるといった意見も聞かれた。</li> </ul>
介護について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 介護予防や認知症予防への関心は高いが、具体的にどのようなことをしたらよいのかわからない人が多い。</li> <li>・ 介護経験の有無や身近な人の要介護者の有無などによって、介護に対する意識などが大きく異なっている。</li> <li>・ 特に介護経験のない人は、健康であり自分にはまだまだ関係がないと考えている人が多い。そのため、要介護状態になった場合、どのように対応するかが分からない人が多い。また、介護保険についても、制度の詳細について知っている人は少ない。</li> <li>・ 介護経験のある人は、おおむね介護保険の制度などについての知識をもっている。また、相談場所なども知っており、介護が必要な状態になった場合への不安もあまり感じていない人が多い。</li> <li>・ 若年、一般高齢者ともに、認知症に対する不安は大きいものの、正しい知識を得る機会が少なく、対応方法などについてもわからないため、認知症が発症したら在宅生活がおくれないと考えている人が多くみられた。</li> <li>・ マスコミなどで報じられていることもあり、希望しても施設に入所できないことに対して不安を感じている人も多くいた。一般の人への介護保険制度の普及・理解がまだまだ浸透していない。</li> </ul>

## 2. 要介護高齢者への対面調査

### (1) 実施数

要介護者ご本人や介護者へ訪問し、対面調査を中心としたヒアリング調査は以下のとおり実施しました。

	奈良	西和	東和	中和	南和	合計
訪問数	34	24	23	26	21	128

### (2) インタビューで出された主なご意見

#### ① 日常生活や相談について

日常生活について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本人、家族ともに、現在の健康状態の維持や向上に向けて、気をつかっている人が多い。</li> <li>・ 要介護度が低い人、特に要支援の人などは趣味活動を行っている人が多くみられた。</li> <li>・ 配偶者や家族と同居している人が多く、要介護者自身が日常生活に不便などを感じることは少ない。</li> <li>・ 要介護度が低い人で、家族と同居、または近居の人は、洗濯物をたたんだり、草取りなど自分でできる範囲の家事をして、家族の役にたつことを喜びとしている人が多い。</li> <li>・ 高齢者のみの世帯が多く、老老介護の世帯が多くみられた。</li> <li>・ 要介護認定を受けたときに、トイレやお風呂の手すりを付けたという人が多い。また、マンションなどの居住者は、トイレやお風呂に手すりが既に付いているところも多いため、あまり住宅改修などをしていない人が多い。山間部では、土間や水回りと居室に大きな段差があり費用が大きくなる、また、手すりをつける場所がない（和室が続き、襖や障子ばかりで壁がない）などの理由で改修していない世帯もいくつかみられた。</li> </ul>
相談窓口の認知度や相談者の有無	<p><b>【相談窓口の認知度】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 要支援の人以外は、地域包括支援センターは知っているが利用したことがない人が多い。利用している人でも、対応するケアマネジャーによって評価が異なり、かなり頼りにしている人もあれば、月1回程度の定期的な対応を事務的に行っている人もいる。</li> <li>・ 要介護度の高い人の介護者は、地域包括支援センターの認知度が高く、ケアマネジャーや主治医とも頻繁に相談してきている人が多い。「主治医がいなかったら、とても在宅では介護できなかった」「ケアマネジャーに励まされてなんとか介護できている」という意見がよく聞かれた。</li> <li>・ 民生委員についても、日常的にかかわりのある人から、全く知らないといった人まで、かかわりの程度がかなり異なっている。民生委員の活動が活発なところは、定期的な訪問などを受けているところもある。</li> <li>・ 市町村から配布された介護保険に関するパンフレットが手元にあり、事業者やサービスについての説明が詳細でわかりやすく、助かったという意見もあった。</li> </ul> <p><b>【相談者の有無】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 配偶者や家族が一番の相談者であることは一般高齢者と変わらないが、介護に関しては、主治医やケアマネジャーを最も頼りにしている人が多い。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>他の家族を頼りにできない要介護者や介護者には、相談者が誰もいず、相談者が必要と考えていない人もいた。</li> </ul>
--	--

## ②介護について

申請のきっかけ、ケアマネジャーとの関係	<ul style="list-style-type: none"> <li>要介護の申請を行ったきっかけとはさまざまだが、病気などがきっかけとなっている人は担当の医師などからのすすめで申請している人が多い。</li> <li>家族や介護者が申請した場合は、デイサービスなどサービスを利用したくて申請した人が多い。</li> <li>ケアマネジャーとの関係もさまざまで、かなり頼りにして相談している人もいれば、ほとんど顔を合わせることもなく、物足りなく感じている人もいる。</li> </ul>
サービスの利用状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>訪問介護や通所系サービスを利用している人が多い。一方で、中・重度者には医療的ケアの必要な人が多いが、医療的ケアの必要な人を受け入れてくれる事業所が少なく、サービスを利用しづらいため、より介護者への負担を高めているといったことが多く聞かれた。</li> <li>介護者がいる場合は特に、要介護者本人もできる限り在宅で生活を送りたいと考え、介護者も在宅で介護をしたいと考えている人が多いが、認知症が発症したときは施設に入りたいと考えている人が多い。要介護者本人、介護者ともに、認知症に対しての知識や対処方法などを知らないこともあり、認知症への不安が大きいことがうかがわれる。</li> <li>ショートステイについては、利用希望や満足度は分かれ、比較的要介護度が低い人は利用希望が低い。一方で、要介護度の高い人や介護者があまり健康ではない場合、比較的ショートステイの利用希望が高い。また、ショートステイは早くから予約が必要で、緊急時の利用を希望する声も聞かれた。</li> <li>要介護度が高く寝たきり状態の人の介護者は、このまま在宅で介護したいと望んでいることが多い。要介護度が低くても、認知症などにより家族内でトラブルが起きている場合などは、ショートステイや施設への入所を希望する切実な意見も聞かれた。</li> </ul>
満足度	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在利用しているサービスについては、おおむね満足している人が多い。</li> <li>実際に利用することで、身体状況の改善がみられたり、維持につながっていると実感している人は特に満足度が高い。</li> <li>一方で、訪問系サービスについては、不満を感じている人もいるが、サービスの内容などについてケアマネジャーと要介護者との間で共通理解ができていないために、トラブルになるケースもみられた。また、家事援助については、水準がヘルパー自身の資質に左右されることが多く、トラブルになるケースが多い。要介護度が低く、ひとり暮らしの要介護者からは、ヘルパーの訪問時間が短すぎるという意見がいくつか聞かれた。</li> <li>予防サービス利用者の中には要介護度が低くなったことで、サービスを受けられる回数が減り、現在の状態を維持することが難しくなっている人もみられた。</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>介護者が配偶者の場合、老老介護となっており、現在は介護者の健康状態が悪くないため成り立っているが、後期高齢者の場合、介護される側、する側ともに、状況の変化の可能性が大きく、そのための対応などについては、考えたり、相談するといったことをしていない人が多い。特に介護者が要介護者より高齢の場合、不安も強いが、自分の健康管理に特</li> </ul>

	<p>に気をつけている人が多い。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 介護者への支援を求める声もかなり聞かれた。具体的には、同じ介護者同士の交流などで、日々の苦勞をねぎらったり、情報交換ができる場を求める声も聞かれた。</li> <li>・ 特に住宅密集地の場合、認知症を有する要介護者の介護者から、近所の理解を求める声が聞かれた。山間部では、認知症であろうとなかろうと助け合う気風があるためか、ほとんど聞かれなかった。</li> <li>・ 服用する薬によっては、妄想・幻覚などの副作用で深刻な状態に陥る場合があり、薬を変えたりやめたりすることで妄想・幻覚が治まったという体験談がいくつかあり、適宜相談できる窓口設置への希望が聞かれた。</li> <li>・ 介護タクシーについては利用者が少なく、利用制約があり使いにくいなどの意見が聞かれた。</li> <li>・ 配食サービスについても利用者は少なかったが、申し込み先や休止の手続きが大変、味付けはよいが堅くて食べにくいなどの意見が聞かれた。</li> </ul>
--	---

### 3. 事業所への訪問対面調査

#### (1) 訪問先及び目的

介護保険サービス提供事業所への訪問対面調査として、下記の事業所を訪問し、事業の取り組み状況や介護報酬改定の影響、事業展開についての考え方などについて意見聴取を行いました。

また、事業所に従事する方にも、介護職についたきっかけや現在の状況、今後の考えなどについても意見聴取を行いました。

	奈良	西和	東和	中和	南和	合計
事業所数	16	14	5	16	11	62
サービス数	66	55	19	56	43	239

#### (2) インタビューで出された主なご意見

##### ① 事業所の経営面での取り組みや課題について

経営面での取り組みや課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 収支がトントンの事業所が多い。</li> <li>・ 複数の事業を行っているところは、他の事業でカバーしている事業所もあるが、おおむね、それぞれの事業で黒字になるように努力している。</li> <li>・ 収益を向上させるために具体的に実施していることとしては、通所系サービス、ショートステイ、施設系サービスともに、稼働率を高めるといったことをあげる事業所が多くみられた。</li> <li>・ 施設系およびショートステイを実施している事業所は、稼働率を高めるため、関連機関（地域包括、病院、ケアマネジャー）との連絡を密にして、空きが出た場合にすぐに埋められるような体制をとっている。しかし、年々、重度の入所者が増えてきており、重度者は状態の変化も激しく、対応が大変であるといった声が多く聞かれた。</li> <li>・ 通所系サービスについては、実績払いであるため、急な入院やショートステイの利用などで、サービスを提供できないことが日々発生しており、稼働率を高めて収支を良くすることがかなり難しいといった声も聞かれた。</li> <li>・ 経費削減については、日常の備品をはじめ、光熱費などの削減などを行っているところが多い。</li> <li>・ 複数の事業所をもっているところなどは、備品などの共同購入を行うことで経費削減を行っているところもみられた。</li> <li>・ その他、作業の効率化を図り、時間外労働を減らして人件費を削減するといった工夫もみられた。</li> </ul>
職員確保・定着のための取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 人材の確保について、あまり苦勞していないという意見と、介護関連サービスは全体的に給与が低いため、確保にかなり苦勞しているといった意見に分かれた。</li> <li>・ 苦勞していないという事業所については、職員の勤続年数が長いところが多く、また、新規の職員も知っている人から勧められた、誘われたという人が多い。また、日々の研修体制が整っているところが多くみられた。</li> <li>・ 一方、確保が難しいところについては、若い人を採用したいと考えていても、介護を学ぶ若者が少なく、人材が不足していると感じていたり、報酬が下がる、あるいは変わらない場合、職員の給与を定期的に</li> </ul>

	<p>上げることが難しく、ある程度の年齢の人しか採用しにくいという意見が聞かれた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 定着の取組みとしては、できるだけ働きやすい環境を作るため、休暇をとりやすくする、時間外労働を出来るだけさせないといったことをしている。</li> <li>・ また、ある程度の規模以上の事業所では、従事者のライフスタイルに合わせて配置転換や就労時間の配慮などを行うなどの工夫を行っている。</li> <li>・ 新規採用から2～3年目が退職しやすいため、プリセプターシップ（今年入社した社員に対して昨年かその前に入社した職員が教育、相談する制度）を取り入れたり、アドバイザーを設けるなど教育体制に力を入れているところもみられた。</li> <li>・ その他、事業所内で保育所などを設置するといった工夫を行っているところもある。</li> <li>・ 夜勤に対する負担を感じている職員が多いこともあり、夜勤手当の充実を図っているところが多くみられた。</li> </ul>
業務の効率化のための取組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 事務作業のOA化を進め、作業効率を高めるようにしているところが多い。</li> <li>・ また、情報化を進めることで、情報共有が図りやすいといった意見も聞かれた</li> </ul>
サービスの質の確保、充実などのための取組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 職員の研修を手厚くすることで、個々の資質向上を図り、サービス全体の質を高めているところが多い。一方で、単独事業などは、事業所内だけで研修を行うには負担を感じているところもあり、県などに多様な研修の実施を希望している。また、研修受講に対しても業務の一環としてとらえ、就業時間として認めているところも多い。</li> <li>・ 研修だけでなく、資格取得を支援する事業所も多い。具体的な取組みとしては、有資格者が資格取得のために講義を行ったり、勉強会の開催、受験料や資格取得者の登録料の負担軽減を行っている。また、有資格者に対して、資格級などを設けているところもあり、さまざまな方法で、資格取得の支援を行っている。</li> <li>・ 資格取得だけがサービスの質の向上につながるわけではないものの、一定水準以上の質を保つために必要と考えている事業所が多い。また、有資格者が多くなることで、サービス提供体制加算なども取りやすくなることから、積極的に支援している事業所が多い。</li> <li>・ 利用者本人や家族からの要望やクレームに対しては、個々の職員が受けるのではなく、サービス提供責任者や相談員が受けるようにし、個々の職員の負担軽減を図っているところが多い。</li> </ul>
医療面での対応に関する課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 在宅サービス、入所系サービスともに、医療ニーズの高い利用者が増えている一方で、対応できる看護職員が限られており、積極的に受け入れているところは少ない。</li> <li>・ 特に胃ろうの人や透析などが必要な人を受け入れられる事業所が少ない。</li> <li>・ 現在の配置基準で医療ニーズの高い利用者を増やすことは難しく、今後受け入れを増やす場合は、医療機関との連携・協力体制の強化などが必要と考えている事業所もある。</li> </ul>



## ②介護報酬の改定の影響や介護報酬算定加算等について

介護報酬の改定の影響	<ul style="list-style-type: none"> <li>介護報酬の改定により、上がったところについては、やや楽になったという声もきかれるが、ほとんどがあまり影響を感じていない</li> </ul>
介護報酬算定加算について	<ul style="list-style-type: none"> <li>加算については、できるだけ加算の申請を行うという考えの事業所と積極的には加算申請を行わないという考えの事業所に分かれる。</li> <li>加算の申請を行っているのは施設系サービスのところが比較的多い。</li> <li>人的体制の加算については、基準をみたせば申請をしているところが多いが、有資格者の割合の維持が難しく、規定に達してもすぐには申請しないとあったところもある。割合を維持するため、介護福祉士やケアマネジャーなどの資格取得を奨励しているところが多くみられた。</li> <li>それ以外の加算については、加算をすることで利用者への負担が増えることになるが、利用者は利用料に対してはシビアであることから、基準を満たしているから加算を申請するということはしづらいのが実情である。</li> <li>また、加算にかかる事務的負担がかなり大きく、加算額に見合わないため、行わないという事業所が多い。</li> </ul>

## ③介護職員処遇改善交付金について

介護職員処遇改善交付金の申請状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>説明会を実施しているところもあるが、対象の職種が限られていることから、掲示と個別説明を行っているところが多い。</li> <li>介護職に対して、一時金として支払うところもあれば、職種を問わず全員に支払うところもある。</li> <li>職種を限定することに対して、不満をもっている事業所がかなり多い。</li> </ul>
【申請している事業所】 処遇改善の内容などを具体的に	<ul style="list-style-type: none"> <li>基本給を上げたところも一部でみられたが、期間限定ということもあり、一時金として支給するところがほとんどである。</li> <li>対象は、介護職に限定しているところと、全職員（正規社員、パートとも）を対象とするところに分かれる。看護職や相談員でも介護の仕事を手助けすることもあり、介護職だけに限定せず、全員を対象としてほしいといった声が多く聞かれた。</li> </ul>
職員への周知の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>説明会や朝礼などの場で周知しているところが多い。</li> <li>少ないものの、掲示板に張り出すだけといったところもあった。</li> </ul>
【未申請の事業所】 申請をしていない理由	<ul style="list-style-type: none"> <li>対象者が少ない、手続きが煩雑ということでまだ申請していないところもあった。</li> </ul>

#### ④介護従事者

<p>介護に従事したきっかけ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 40代、50代の女性は、知り合いに誘われたり、勧められて始めた人が多い。就業先についても、知り合いの紹介という人が比較的多い。</li> <li>・ 若い人は、介護に関心があり始めた人が多く、資格を取得して就職した人が多い。</li> <li>・ 反面、若い人のなかには、介護や福祉に関心があったわけではないが、安定した職業として応募し、就職した人も幾人かいた。</li> </ul>
<p>介護のやりがい</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 利用者からの「ありがとう」といったねぎらいの言葉や、実際に状態がよくなる姿をみると、日々やりがいを感じるという声が多数きかれた。</li> <li>・ 利用者になぐさめられたり、癒されていると感じている人もいた。</li> <li>・ 職場の同僚とチームを組み、どのようにケアするか話し合い、方針を決め、チームで対応し、結果がよいときにはチームで喜ぶというところに大きなやりがいを感じている人もいた。</li> <li>・ ほとんどの人が介護の仕事が好きで、楽しいと感じている。</li> </ul>
<p>現在の不安、将来について</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 利用者や家族との関係で不安や不満を持っている人はほとんどいない。</li> <li>・ また、職場の雰囲気の良いところが多く、職場の人間関係で不安を持っている人は少ない。</li> <li>・ 入所施設の夜勤については、万一のことが起きたらと不安をいっている人が多い。</li> <li>・ 資格取得やスキルアップへの意欲が高く、研修への参加など自己研鑽を行っている人が多い。</li> <li>・ 人的配置に余裕があるところは少なく、特に正職員は休暇を取りづらいと感じている人が多い。休暇取得は職場の雰囲気やマネジメントする人によるところが大きい。ただし、パート職では、子どもの学校の都合に合わせて勤務できるので、他のパートより条件がよく助かるという人もいた。</li> <li>・ 大半の人は、仕事の内容に比べて賃金が低いと考えている。特に若い年代の人は、介護の仕事は好きなものの賃金が低いことから、このまま介護の仕事が続けられるか不安を感じている人が多い。 また、せっかくよい人間関係が築けている職場でも、賃金の低さから同僚がやめてしまうのではないかと不安をもつ人もいた。</li> <li>・ 将来も続けたいという人が多いが、体力的に高齢になるとつらいといった声もきかれた。一方で、景気がよくなり、給与が高いところがあれば、職種に関係なく転職したいという声も聞かれた。</li> <li>・ 一般の人の介護に対する理解がまだまだ浅いこともあり、介護への理解を深めてほしいという声が多く聞かれた。</li> <li>・ 介護職については、テレビの報道番組などで賃金が低いことばかりが取り上げられ、仕事の素晴らしさを伝えるものがないという意見が聞かれた。仕事のやりがい、すばらしさを伝えることさえできれば、就職を希望する若い人が飛躍的に増えるのではないかという意見も聞かれた。</li> </ul>